

第19回県政ひざづめ談議結果概要

○実施日時：平成21年1月28日 14:00～

○開催場所：山梨市フルーツセンター

〔司会〕

皆様お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。
ただいまから知事対話の『県政ひざづめ談議』を始めさせていただきます。
進行役を務めます県の広聴広報課長、田中でございます。よろしく願いいたします。
それでは、始めに横内知事からあいさつをお願いいたします。

〔知事〕

皆さんこんにちは。

今日はそれぞれお忙しい中、こうしてお集まりいただきまして本当にありがとうございます。皆様方はそれぞれ農業経営を中心的にやっておられると聞いております。本当に日頃ご苦労様でございます。農業が様々な課題を抱えている中で、色々な問題意識を持ちながら日々一生懸命取り組んでいただいていると思うわけであります。

今日は、ざっくばらんに日頃の農業経営の中でお気付きになったことなどを、遠慮なくおっしゃっていただければありがたいと思っております。

私も、農政は山梨県の中で大変に重要な分野だと思っております。一生懸命やっているつもりでありますけれども、長期低落傾向と言いましょいか、長い間に少しずつ農業が落ち込んできておまして、それを反転をさせることがなかなかできない状況であります。皆様方の知恵をお借りしながら、なんとか農業の振興ができるように努力していきたいと思っております。今日はいろんなご意見をお聞かせいただければありがたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

〔司会〕

本日出席しております県と市の担当者を紹介させていただきます。

まず、果樹の振興対策、それから農産物の販路拡大など担当しております県の農政部の齋藤果樹食品流通課長でございます。

農村女性活動の支援、それから担い手対策などを担当しております同じく県の農政部の西島農業技術課長でございます。

市から武藤農林課長です。

本日は「JAフルーツ山梨」に所属する女性の皆様と、女性がもっと地域農業に参画できて、元気な地域農業をつくっていくための方策などについて対話を進めていきたいと思っておりますので、是非忌憚のないご意見をよろしく願いいたします。

おおむね1時間を予定しておりますけれども、是非参加者全員が発言できますようにできるだけご協力をお願いいたします。

〔知事〕

（机の上の加工品を見て）これは皆さん、それぞれお作りになっているんですね。これは何ですか。石鹼ですね。廃油を使ってお作りになったんですね。そうですか。なるほどね。

これは桃のシロップですね。大体桃の農家はみんなこういうものをお作りになっているでしょう、市販はしなくても。そうでもないですか。

〔参加者〕

農繁期は暇がなくて。

〔知事〕

これはピーチジャムね。これは道の駅で売っているんですか。

〔参加者〕

ここの直売所です。

〔知事〕

ここで。ああ、そうですか。売れますか。

〔参加者〕

何か今はお客さんが少ないみたいで・・・。何かまだたくさん置いてありまして（笑い）。

〔知事〕

それでも一年に100万や200万売るでしょう（笑い）。

これは手作りのリンゴジャムですね。牧丘にもリンゴはあるんですかね、採れますかね。どなたがおやりになっているんですか。

〔参加者〕

ここにはいないです。

〔知事〕

あっ、ここにはいない（笑い）。

この桃の瓶詰めはまたさっきのと作り方が違うんですかね。桃の種類が違うのかな。ああそうですか、黄色い桃ね。ありますね、確かね。それぞれ工夫されてやっておられてね・・・。

専業農家の方はどなたですか、ちょっと手を挙げていただいて。ほとんど専業農家ですね、ああ大部分ですね。兼業の方も少しいらっしゃいますね。

そうですか。大変ですね（笑い）。特に果物というのは女性の手が非常に必要でしてね。桃というのは本当に手が掛かって、剪定とか何か色々あるんですが、旦那さんは嫌になるとすぐどこかに行っちゃったり（笑い）、今日は無尽だからとか何とか言ってね。女性はもう一日中おやりになるから、本当に山梨の果樹栽培というのは女性で支えられているよう

なところがありますね。ご苦労さまです。

〔参加者〕

私は専業農家のほうに手を挙げました。主人が2年前に退職して、私も勤めていたんですけど退職して農業を始めたので、まだ日が浅いんですけど。

農業収入が少ないから、現状だと農業だけで生活するというのはすごく大変なことで、だから今ほとんどは兼業農家というか、旦那さんが退職して始めるという方が多いんじゃないでしょうかね。やっぱり専業農家でも生活できるような農業経営というか、農産物の販売価格が安定していれば農業にも魅力があるかもしれないけども、価格も不安定だし、20年前と価格が変わらなくて、でも物価は上がっているから、専業農家というのはいくらも厳しい現状にあります。

農業を始めて一番感じていることは、住民の方にもう少し農業を理解してもらいたいということ。そうするともっと楽しく幅広くできるかなと思うんです。新興住宅地とか新しい住宅ができると、消毒の時も遠慮してしまいまして、農業がしにくくなっています。今自給率も40%と低いなかで農業をするというのは、やっぱり周りの協力が大事なんじゃないかなということを感じています。

〔知事〕

やっぱり近くに住宅なんかあると気をつかいますか。

〔参加者〕

そうですね。例えば市営住宅があると車もたくさん駐車してますよね。だから消毒の前日に自治会長さんに電話をして、明日の朝消毒したいから、その時間車をちょっと移動して下さいとお願いしたり、あとは住宅地の中ですと前の日に何軒か電話をして、明日の朝早く消毒しますから洗濯物を出さないようにとか・・・。

〔知事〕

そうですね。そういう神経を使っているんですか。言わないでやると怒られるわけですか。

〔参加者〕

車は特に・・・。車に消毒液がかかったら、もうその年の桃の収入を全部つぎ込むぐらい賠償金を取られたっていう話も聞きます。

〔知事〕

だけど農薬がかかって何か困ることがあるんですかね。洗い流せばいいんじゃないですか。

〔参加者〕

落ちない農薬もあるんですよね。春先に使う硫黄合剤というのはもう絶対落ちないです

から、それをする時は特に・・。だからうちはもう硫黄合剤をしなくて、それに代わるパルノックスという薬剤を散布するんです。あとはビニールのカーテンを付けるとか、色々工夫はしているんですけども、ほかにも消毒の音がうるさいとか、紙が舞うとか、いろんな苦情がいっぱいきまして・・。

〔知事〕

まあ遠慮しいしいやっているわけですね。

〔参加者〕

そうです（笑い）。

〔知事〕

可哀想ですね、全くね。

〔参加者〕

山梨は空気が良くて、水が良くて、そして農産物も色々豊富に出たりしますし、地球温暖化対策のためにも緑をたくさん残してほしいなと思いますので、もうちょっと住民の方、県民の皆さんに、農業に対して理解をしてもらいたいなということを常々感じます。

〔知事〕

そうですか。分かりました。

果物の価格もおっしゃるように20年前ぐらいがピークでね、昭和50年代の後半ぐらいですか。あとはずっと横這いか、ずっと段々下がってくる感じでなかなか大変ですよ。農業したって儲からないですよ。儲からないから立ちゆかなくて跡取りが来ない、いないと。確かに皆さんだって自分たちの息子に、跡を、農業を頼むという以上は、ある程度儲からないと、先行きの夢がないと・・ですよ。それでもやっぱり息子さんが跡を取っているという方が多いんでしょう。そうでもないですか（笑い）。

南アルプス市ですと10軒に2軒、3軒ぐらいですかね。まあ退職して入ってくるという方はもちろんいますけれども、若い跡取りがいるというのは2軒か3軒という感じがしますね。

〔参加者〕

一応息子が退職して跡を継いでくれればいいなと思って、その間を繋いでいこうかなと思って・・。

〔知事〕

1町歩ぐらいやっているんですか。

〔参加者〕

いいえ、とても。兼業農家だったので。今空いている遊休農地を借りたりしているから、

とりあえず8反ぐらいは・・・。

〔知事〕

8反もね、これはえらいよね。

〔参加者〕

でも高齢になってくるから大変です。

〔知事〕

そうですね。あと30年ぐらいがんばって下さい（爆笑）。まだ大丈夫じゃないですか。

〔参加者〕

うちもやはり兼業なんです。2年前に主人の父が亡くなりまして、それまではおじいちゃんが主に、私はちょっと手伝ってやっていました。主人は勤めています。おじいちゃんが急に亡くなったもので、さてどうしようかと。まず剪定ができない。そして主人も分からない。農協の指導課の人に聞いて、「今見た感じだと分かるけど・・・」と思っても、「じゃあやってみて」と言われても分からなくて、それで2年経ちました。幸い隣の畑のおじさんが2、3日前に「どれどれ」と見てくれて、ちょっと多いなとか教えてくれて。やはり育成というのは、農協の指導課でも指導をしていただけるんですけども、農家のおじさんとか近所の人たちの力というのはやはり一番ありがたいです。本当に素人がやっているようなものなので助かります。

あと今まで化学肥料みたいなものを使っていたんですけども、4年ぐらい前に使わなくなった人がいます。EM菌肥料を作ったんです。ちょっと大変ですけども。それを家でも使って、桃を一応5反ぐらい作っているんですけども、まあ効果が出始めているかなと思っています。

〔知事〕

EMはいいですか。農薬なんか割と少なくて済みますか。

〔参加者〕

土地がふかふかになります。微生物の菌ですからいいと思うんですよね。

〔知事〕

できる桃もいいですか。

〔参加者〕

一つの畑は本当に木を全部切っちゃおうかと思ったんですけど、それを使い始めて持ち直しまして。

〔知事〕

元気になったんですか。

〔参加者〕

はい。亡くなったおじいちゃんもあれが良かったなと言っていたぐらいですから。

ただ言われたとおり後継者というのはやっぱり・・・。だから一応主人が後継者ですけどその跡はもう、ないです。

〔知事〕

ないですか。困っちゃったですね。だけど周りの農家の方が助けてくれるというのはいいですね。

〔参加者〕

はい、助かります。ありがたいと思います。

〔知事〕

それはご夫婦の人柄もまたいい、おつき合いもいいということだと思いますよね。そうですか。EM菌は確かに、少しずつですけど普及してきていますよね、確かにね。

あと、いかがですか。

〔参加者〕

過日、広報2月号に『にほんの里100選 牧丘・八幡地区』が載りましたよね。思わずわーって言って喜びました。その牧丘におります（笑い）。

皆様と全く違いまして、私本当に農家を一人でやっているんですね。父がちょうど3年前に亡くなりまして、母が86歳、ちょっともう農業はできません。後継者はおりますけど、いろんな問題でできません。

牧丘はすごく素晴らしい所で、自分のPRになりますけれど、私12、3年前に農業委員をさせていただきまして、その時に初めて地域農村の行く末とか、そしてまた皆さんの思いとか、農業を肌で感じまして、農家がこれからやっていかなくちゃならないことがわかりました。

やはり一番大切なのは、自分自身が農業を好きであることですよね。皆さんに力を貸していただいて、皆さんにお世話になり、農協の方にもお世話になり、そして今があります。だから私一番好きなのは牧丘の夏の葡萄園で舞う蛍、今度県でも蛍の育成をしていただくようですが・・・。

〔知事〕

牧丘で蛍が。

〔参加者〕

はい、ちょうど今年の事業で、ありがとうございます。知事さんのお陰で（笑い）。本当

に素晴らしい所です。川には蟹もいますし、ハヤもいますし、やっと皆様のご期待どおりの地域になりまして（笑い）。

〔知事〕

えらいまた、大満足ですね（笑い）。えらい勢いで手を挙げたから、何か難しいことを言うのかと思った（笑い）。

地域を本当に愛しておられるということは素晴らしいことですよね。

田んぼですか、畑じゃなくて。

〔参加者〕

いいえ、葡萄です。

〔知事〕

葡萄、巨峰ですね。去年は悪かったですね、葡萄がね。

〔参加者〕

はい、もう大粒の涙がでました（笑い）。それでもやはり消費者の皆さんに喜んでいただけるように、牧丘のPRを自分なりにさせていただいて、本当にここはいい所だと皆さん感動してくれるんですよね。

〔知事〕

そうですね。南斜面で富士山が見えてね、まあ見えない所もありますけどね。だからいわゆる二地域居住というか、東京の方が移り住むのに牧丘は割と人気がありますよね。

〔参加者〕

もう本当にありがたいです。

私が今抱えている中で一番の問題が労働力の問題でして、今、季節労働者が年々年を取りまして、本当に人がいないんですよね。そして若い人の育成がまだできていません。それで労働賃が農家の場合年々高くなりまして、本当にあっちの家があのからい出すならこっちももっと出さなくちゃという競争になっています。

それで労働賃と農資材費を引きますと経営は赤字で、本当に行く末が危ぶまれます。私はまだあと10年か20年やっていますけど、それ以後のことを考えますとちょっともうそういう面で農業は本当に……。私は好きでやっているんですけど。

〔知事〕

赤字でやっているんじゃ、人のために農業をやっているようなものかもしれませんね。

〔参加者〕

はい、そこを言いたいです私は（笑い）。

〔知事〕

やっぱり労賃が上がるんですかね。

〔農業技術課長〕

まあ競争になっているんでしょうかね。2月の農業委員会で決めますよね。

〔参加者〕

はい、一応農業委員会で決めていただきますけど、その農業委員会の価格ではちょっと誰も来る人はいません。

〔知事〕

やっぱりお近くのサラリーマンの奥さん方とか、そういう方々を頼んでいるんですか。

〔参加者〕

そうですね。でもある程度経験が必要ですので・・・どうか後継者が次の世代に続いていただいたら嬉しいんですけどね。

第2は温暖化の問題がありまして、黒系葡萄が全くだめなんですよね。特にピオーネが着色不良で赤くなってしまって、もう赤いを出すと、味はいいんですけど・・・。

〔知事〕

色がだめになっちゃうんですね。

〔参加者〕

それが大変でして。また去年冷夏でして、種ありが無核になりました。ほとんど家の周りは種ありが無核になってしまって・・・もう見事に全部そうになりました（笑い）。

これからの温暖化に対しまして、何が適しているかとか、もう少し県のほうで考えていただいて、そして地域に合った果実を作らせていただけるように。私自身も努力をしております、労力の問題には短梢剪定とか、種なしとか、そういうものを試みておりますけど、苦労がありますね。

この私の思いをみんなに伝えていただきたいと思います。作る楽しみもありますから。以上でございます。（笑い）

〔知事〕

そうですね。ありがとうございました。

まあ温暖化の問題というのは本当に、ある人は牧丘はもう巨峰が無理じゃないかとか、そういうふうに言ったりする人もいましてね、我々も心配するんですけど。温暖化に対応したような新しい種というか、巨峰なら巨峰でもそういう温暖化に強い種というのがあるんでしょうからね、そういうものを一生懸命開発したりとか。まあしかしあれだけの巨峰の里ですから別の種類を植えるというよりも、やっぱり巨峰でいきたいですよね、できればね。それはどうですか。

〔農業技術課長〕

温暖化で困るのは、徐々に温度が上がるならまだしも、温度変化とか気候変化が急にあってということなんですよね。4月にもものすごく暑い日があったり、そういうことへの対応なんです。じわじわ上がってくる温度なら暖かい所のものを植えることも、導入することもできるんでしょうけどね。いろんな課題がありますので、一生懸命果樹試験場でも研究しているところです。

〔参加者〕

よろしくお願いします。

〔参加者〕

桃も温暖化の影響があつてね、早生の物はいいけど、去年白鳳系とか、そういうものは色が着きにくかったですよね。早く過熟になっちゃったりとかね。果物全体にそういう影響が出ていますね。

〔知事〕

そうですね。

〔参加者〕

うちは2年前に法人化しまして、地域の果物産業を守る、技術を後継者に伝えていくということで経営しています。

まず後継者の支援の問題ですけど、就農支援センターから、農業をやりたいという都会の方をよくお預かりするんです。県にまず要望したいことは、うちは自分の所で研修生の寮を自費で建ててあるからいいんですけど、やはりそういう方たちが来て、いろんな農家を回って山梨に住んで農業をやりたいと思っても、住む場所がないとなかなか難しいですよ。

そして本当に何も分からない人を一泊二日をお願いしますと頼まれて、その人に一つ一つ教えるんですよ。ほかの仕事を休んで、来た人に親切に教えて、余り嫌な印象を持って帰らないようにということで、私かうちの社長がついて一生懸命教えるんですけど、そういう人がかなり多いんです。自分のうちの仕事が遅れるということもありますので、やはり受け入れ農家にもそれに対して補助金というか、少し何か支援をしてもらいたいということがあります。

うちも都会から来た若い従業員を雇っていて給料も出さなきゃいけないから、いろいろ農業のことを考えます。先日加工についての国の指針が出たんですけども、やはり山梨県の生の果物というのは年々もう消費が落ちている。もう国でもはっきり落ちていると言っているんだから、やはり次の手立てというものを取ってもらいたいと思います。落ちている果物をどんどん作って、そして農薬かけて、人件費かけて、年末に見たら赤字というような農業だともう絶対に続かないですよ。

そして果樹試験場でも、生鮮食料の生の葡萄をと言うけれども、もっと目先を変えて、例えば加工に合うような、農薬もそんなにかけなくてもいいような果物を開発するとか、

ワインに対しては醸造用の葡萄ということでやっていますが、そういう発想の転換ですよ。そういうことをしてやはり農業で食べていけるような、いろんなアイデアを出していただきたいですよ。

例えば群馬のほうでは花桃を市場に出していますよね。やはり高齢になればそういうやり方もあるし、みんな同じ方向を向くんじゃなくて、その年代に合った、やれる方法を、果樹試験場のほうでもいろんなジャンルを見据えた中で、山梨県の果樹産業というのをつぶれないように支援をしてもらいたいです。

そして加工のことも、給食とか、今までは中国とかの輸入物の果物を使う傾向だったんだけど、業者さんも国産の果物に目を向けているということもお聞きしましたので、例えば峡東地域で加工の施設を造ることによって、そしてまずは地域の、山梨県の子どもたちから始めていく。加工した果物であれば一年中給食でも食べられるわけだから、ピューレ状のものを例えばケーキに入れるとか、おまんじゅうを作るとか、商工会議所とも一体になった形で、生があったり、果物のお菓子があったり、ジュースがあったり、ピューレがあったりといった、そういう大きい視点の中で一つの事業計画を立てていってもらえればいいんじゃないかと思うんですけどね。

〔知事〕

良く分かりますね、確かにね。まあ結局従来の農業経営のやり方ですとジリ貧になっちゃうんですよ。だって人口が減っているんですから。需要が減るんですから、消費が減るに決まっているんですよ。いくら今までの物を一生懸命出そうとしていい物を作ったって、結局需要が減っていくわけですから、何か目先を変えて新しい、消費者が飛びつくようなものを作っていく、それが加工ということがあるかもしれないし、まああるいは我々が輸出輸出と騒いでいるのもそれで、向こうはもうぼんぼん増えているわけですからね。そっちに出していくということもこれは大事なことだと思うし、何かやっていかないと、従来のような形で続けていく限りはやっぱり段々下がっていくという状態が続いて行っちゃいますよね。

また研修生の住宅というのは確かにそうだなと思いますね。それから就農支援センターがぼーんと「頼みますよ」と言ってくるんですか。

〔参加者〕

ええ（笑い）。

〔知事〕

まあきっと快く受けてくれるから、喜んで送り出すんですかね。しかし手間は掛かるしね。ある程度勉強はしてくるんでしょう、農業大学校か、そういう所で・・・。

〔参加者〕

いや、全然してこない人が多いです（笑い）。

[知事]

そうですか。そんなものは全く人助けみたいなものですね（笑い）。
授業料をくれと言いたくなりますね、確かにね。それはそうですね、全く。

[参加者]

でもやっぱり積み重ねと言うんですかね、やっぱりそれも人の出会いだからと思って、
そういう人が一人でも・・・。

[知事]

まあいい人でもいてね、将来従業員になってくれればそれはそれでいいんだけど・・・。

[参加者]

そういう人はなかなか・・・（笑い）。

でもやっぱりいろんな所にアンテナを張ることによって後継者づくりをしていかないと、
農業というのはやっぱりほかの産業と違って長いスパンで・・・。

[知事]

農業の将来のあり方としては、法人化というのは一つの非常に望ましい方向ですよ。ね。
やっぱり法人化をして合理的な経営をして、そして人を雇いながらですね、特に都会の若い人
というのは農業に対する意欲、関心が非常に強いですからね。ただ色々と手間がかかる
んですよ、若い人を連れてくるとね、大変だと思います。

そして単に果物を市場で売るだけでなく観光農園をやってみたり、あるいは加工して
みたり、いろんな手を使って販路を開拓してやっていくというのは非常に大事なことです
よね。まあ本当に大事なことだと思います。確かにそうですね。

今の話もまた話し出せばきりがありませんけど、ほかにも大勢の方がおられますから・・・。
どうですか、ほかにご意見は。どうぞ。

[参加者]

皆さん今言われたようないろんな悩みを抱えていますけど、やっぱり農業に元気が出れば
過疎化というのは解消されてくると思うんです。私の先代というのは開拓で入って、そ
して私は二代目になるんですけれども、せっかく掘り起こした土地を何とか継続していき
たくても、後継者になりなさいよということが言えないんですよ、現状ではね。

年に何度か学校を訪問することもあるんですけれども、小学校に行くたびに児童が減って
いるという状態です。私も実際親たちの姿を見ていて、農業が好きではありませんでした。
けれども農業をやってみて、そして子どもを育ててみると、農業をやりながら子どもを育
てるというのはすごく育てやすいんですね。

というのは農業の状態について、今年はいい葡萄だったよとか、今年はどうで悪かった
じゃんねというような話が家族の中でも出るし、子どもたちもそういう環境の中にいます
から。そして親たちが苦勞している姿も見ていますよ。そういう中で子どもを育てて
いくというのは、私はとてもいい条件だと思うし、子どもを育てやすいなと思うんだけれ

ども、若い人たちに、やってみなさいよと言えないのが皆さんの悩みだと思うんです。

やっぱり食育にもいいですね。おじいちゃん、おばあちゃんが作った野菜を、採れたてを子どもたちに食べさせながら子どもも健やかに育っていく。だけど現状でどんどん人が減っていけば、子どもを教育する環境ではないよねという、そういう話が出てくるんですね。そういう面で是非農業に目を向けていただきたい。

子どもたちを健やかに育てる環境としては素晴らしいということ、若い、今からの人たちにも伝えたくても伝えられない苦しさ、苛立ちというか、そういうものがあるので。

そして今の農業は昔のように体を張って、真っ黒になってやるという農業とはちょっと違うと思うんです。手袋にしても、農作業の器具にしても、使い方によってはすごく快適な農業もできるんですよ。だから農業の暗いイメージを捨てて、若い人たちが農業をいきいきとできるような山梨県に是非していってもらえればなという思いです。よろしく願います。

〔知事〕

いや全くそうですね。さっきも言いましたけども、若い人が非常に農業というものに関心を持ち始めましたね。だから都会なんかでも「何をやりたいか」というと「農業」という若者が非常に多いですね。私のいとこなんかでも証券会社に勤めていたんだけど、最近会って「何をやっているんだ」と聞いたら、「いや、今埼玉県で農業を始めました」なんて言ってね。そういう人がすごく増えてきましたね。

やっぱり環境を大事にする、食の安全を大事にする、そういう時代に、農業というものが若い人にも見直されてきていることは確かなんですね。そして教育の面からもいいことは全くそのとおりですね。まあ是非そういう社会を目指したいですね。ありがとうございました。

〔参加者〕

私は県の色々な研究会に参加させていただいていて、今はパワフルウーマンセミナーに参加しています。いろんな方々と出会いもありまして、すごくためになっているし、農業に取り組む自分の姿勢も年々変わっているなということもよく分かってきました。

私の家は巨峰とキウイフルーツを作る専業農家なんです。そして子どもが3人おりますが、全てそれぞれ自分の道を見付けて飛び出して行ってしましまして、今、後継者はいないという状態なんですけれども、でも「時々地方人」でいてほしいと思っております。

私ももう還暦にそろそろというところなので、そういう何と言うのか、先が限定されているような農家になってきていますので、そこを打破するにはどうしたらいいかという。あと10年先というのを牧丘で見渡してみると、休耕の農地がすごく増えてしまうんじゃないかと思うんです。

パワフルウーマンセミナーでもどういうふうな打破の仕方があるかということを考えていただいたり、自分でも研修させていただいているんですけど、やっぱり体験農業とかグリーンツーリズムといった、そういった形で、夏休みとか土日とか、そういうふうなお休みの時に是非農業の体験をしてもらって、自分の子どもももちろんですが、農業に親しむということからできたらいいなと。

そして巨峰でなくても、その土地が休耕田になった時には、遊休農地としてみんなでそこに作りたいものを作るといような形で使っていけばいいし、森林と言うのかしら、雑木林を教育の場として活かしていけたらそれもいいのかななんて思っていますが、とりあえず草ぼうぼうの、もうどうにもならない過疎地にはしたくないという、そういう考えでいるんですよね。その辺の勉強をしている最中なんですけれども、何か県のほうでもそういう観点で少しお知恵を・・・。

〔知事〕

今おっしゃったことは私も一番心配するところなんですよね。果樹農業というのは割と弱いというか、まあ田んぼならば田植え機と稲刈り機があれば日曜農業でできる、たったたっただけでできちゃうんですよね。ところが果樹農業というのは片手間じゃできませんからね。だから、今農業をやっておられる方が足腰立たなくなってくると本当に休耕になっちゃうんですよね。そういうのが次から次へと広がっていくようなことになるんじゃないかと思ひましてね。

〔参加者〕

もうかなり始まっていますから、あと5年でかなり巨峰の丘の様子も変わると思うんですね。10年というと、今現役でやっている人たちが70を超えてしまいますよね。後継者がいれば、法人化されて大きな企業でも入ってきて下さって、自分たちの土づくりから、そういうものが全て移行できればそれはまたそれでいいんですけれども、何かその辺の悩みが・・・。

〔知事〕

地域全体で見れば若い農業者もおられるでしょうから、それと順々にできませんかね。地域営農組織なんて言うんですよね。

〔参加者〕

若い農業者が法人みたいな形で立ち上げて下されば、私たちは土地を提供して、うまく農業が移行できればそれは素晴らしいことだと思うんですよね。だから若い農業者がどのくらいそういうふうな意識を持っているかと。だから意識づくりも県の指導で・・・。私も今まで色々意識づくりをさせていただいて、例えば家族経営協定だとか、それからエコファーマーだとか、そういうふうな形ですいぶんと自分たちの農業の姿勢は前向きになっています。例えば先ほどもEMのお話がありましたけども、私ももう17年ぐらいEMで栽培しております。持ちも違うし、新鮮みも違いますし、そして食味も全然違うんですよね。

キウイフルーツはもう無農薬で有機栽培という形でやっていますので、そういう形を伝えられる、伝えなければいけないし、伝えていける、そういう条件がもしもできればありがたいなど。せつかく専業農家をしていますので、自分の子どもも無理をしないで農業を継ぐという人が一人ぐらい出てくると嬉しいなど。余り強制するのはだめだと思うので、「時々地方人」でいたら・・・。

〔知事〕

そうですね。それでちょっと来てね・・・。

〔参加者〕

そのためにもグリーンツーリズムだとか・・・今だと収穫が大変なので、みんなに来ていただいてそれぞれ自分の手で収穫を・・・。

〔知事〕

都会で「巨峰の収穫を楽しみませんか」と言えば、みんな喜んで大勢来ますよ。来られてもね、ぐちゃぐちゃになったら（笑い）これは困るけどね。ある程度分かった上でやってももらわないと。

〔参加者〕

そのためにも、インターネットの利用というふうなことを・・・。

県にはほとんど光ファイバーも入ったというようなことですし、ツールとしてのパソコンの操作とか、そういうものを農閑期に研修で農家の私たちに教えてくれるような、そういうシステムがあってほしいと思うんです。やっぱり農家だから農閑期でないと何もできないんですよね。その農閑期の時期になるべく研修を集中して、パソコン1台で、農家に関することは自分でできるようなことを。今パソコンの研修で、農業簿記はもう何年かずっとやって下さっていますので、かなり自分でできるようになったんですけれどもね。それ以外のインターネットの使い方とか、何が危ないよとか、そういうことまで習得できるような研修を是非お願いしたいと思います。

〔知事〕

研修をね。まあ色々な研修の機会はあることはあるでしょうけどね。

〔参加者〕

身近にないと・・・。甲府まで行かなくてはならないというのがだめなんです。

〔知事〕

峡東の農務事務所の中でやってはいるんでしょうね。

〔参加者〕

やっているんです。農業簿記はやっています。でもほかはやっていないんですよね。自分たちがお願いしますというふうな形で何かをしてこないとできないです。

〔知事〕

なるほど分かりました。

〔参加者〕

今年の始めなんですけども、後屋敷（ごやしき）の支所で、普及所の方も出席していただいて農薬の説明会をしていただいたんですね。その時に出た話なんですけれども、後屋敷の一地区で桃の補助事業の一環として、コンフューザーMM（複合交信かく乱剤）を使って2年間減農薬に取り組んだところ、病虫害の発生が少なくて、とても効果があったという話が出たんですね。それで後屋敷地区全体でそういうことに取り組んだらどうかというか、無農薬に取り組んだらどうかということで、運営委員さんが決めて下さったんですけれども、これは経済的にも大分楽になりますし、そしてSS（スピードスプレーヤー：走行式防除機）での作業も少なくなりますから、人には優しいし。

〔知事〕

コンフューザーというのはかく乱剤というものですか。あれはやっぱり地域全体でやらないとだめのようなんですね。

〔参加者〕

だからみんなで協力しないとできないことなんです。桃の密集している畑があれば、それが可能ということなので、山梨全体でもそういうことに取り組んだらどうかと思います。

〔知事〕

今盛んに進めてはいるんですがね。おっしゃるとおり大事なことです。やっぱり効果がありましたか。

〔参加者〕

あったみたいです。

〔参加者〕

そうですか。それはいい話を聞かしてもらいました。

〔農業技術課長〕

通常の散布よりも3割ぐらい削減ができた、という報告もあります。3割というと、コンフューザーそのものはちょっと値段が高くて、十分そちら（農薬）の削減でコストは吸収しちゃいますよね。

〔参加者〕

うちは花きを専業でしているんですけども、やはり担い手の問題なんですよね。うちは長男が桃の毛で鼻炎になっちゃうということで桃はやっていないんです。鼻水もひどいし、目からは涙、僕はもう桃なんかやらないということになって花栽培を始めたんです。これもまたこういう冷えた景気になりまして大変なんですけど。

私も農家に嫁ぎまして、農業そのものは嫌いじゃないんですよね。土から生命が生まれ

て、そして生命が土に戻るといのが自然なことです。不景気になれば、札束を食べるわけにはいきませんが、土があれば何か生産して自分の口に入る、命に繋がるといような気持ちであります。そういうこともありまして農業を衰退させるわけにはいかないって思っています。女性が一生懸命、皆さんがすごく勉強なさっていますけれども、私もそれなりに何とか頑張っってやっっていこうと思ひます。

果実は、愛媛といと「みかん」と言っって、もう全国的に名が知れているんですよ。やっぱりPRに力を入れるといこと。「富士の国やまなし館」って日本橋にございますよね、そういうところも活用していただいて、県にも力を入れていただいて果実、葡萄、桃のPRを是非お願いしたいと思ひます。そんなところですけども。

〔知事〕

おっしゃるとおりでね、大事ですよ。桃も山梨は余りPRをやってこなかったんですよ。やっってこなくても東京に近いから売れるものですからね。そうすると、その東京辺りでは桃といえは岡山かなんて言うんですよ。岡山なんか今全国でも生産量4番目か5番目なんですよ。でも結構PRは一生懸命やるんですよ、三越とか、ああいう所でね。だから結構岡山の桃といのは依然として有名なんですよね。

だからそういうことじゃいかにといことPRは十分始めておりますけれども、特に来年度、今年4月から始まる年度は、もっと本格的に山梨のそういう桃を始めとする、山梨そのもののPRを本格的にやっっていこうかと思っているんですけどね。

私も去年はPRのために青森や京都に行ったりしましたけど、山梨の桃といのはやっぱり知られていますよ。いいものだと。7月になると、あつ山梨の桃が出てくるなど、こいうふうに感ずるとい人が多いですものね。だから評価されているんですよ。だからあとはもっと九州、四国、中国、そっちにもどんどんPRをしていけば必ず販路は開けてくると思ひますね。

本当は輸出をして、今日もついさっき中国大使の崔天凱(サイテンガイ)さんとい人に来てきたんですけど、桃を中国に出せばすごい需要があるんですけど、まだ禁輸状態で出せないんです。どうしてもモモシクイガとい害虫が引っかかってきて非常に困るんですけども。まあ輸出といことも大事だと思っているんですけどね。

〔参加者〕

私は主人の命令一下のもとに日々がんばっております。

私が今一番感じているのはトイレのことです。畑にはトイレがなくて、簡易トイレなんかを借りたりしてするんですけど、畑を移動する時にそれを持っていけない。お手伝いの方をお願いした時にお茶を勧めるとトイレに行きたくなるからいいよといわれて、暑いから脱水症状でも起こしたら困るから飲んでといっても遠慮するんで、それが胸が痛くて、せっかくお手伝いに来て下さっているのに、やはり女性の方は一番気になりますよね。まづそのトイレの問題が・・・。

〔知事〕

やっぱり人を頼んだ時にトイレがないと本当に困りますね。

〔参加者〕

そしてもう一つは農道を広げていただきたい。お年寄りの方の車とすれ違いをする時には、私たちのほうが少し若いのでバックをする。でもバックして片方の車輪を落としてみたりとか、出荷に行く忙しい時期などは大変だし、雨が降った時も困る。だからせめて軽トラックがゆとりを持ってすれ違えるような、そんなふうに農道整備を・・・。

〔知事〕

農道の計画というのは今のところないですかね、奥さんのところは。

〔参加者〕

少しずつはよくなってきているんですけど、うちのところはかなり取り残されている地区だそうです。

〔知事〕

地域全体で計画、要望して、まとまって要望してくれればね・・・。

〔果樹食品流通課長〕

そうですね。皆さん方がそういう地域でまとまって整備をしたいというご要望があればそういう形で・・・。

〔参加者〕

市役所のほうへですか。

〔果樹食品流通課長〕

市役所も通していただくことも大事ですし、県の農務事務所のほうでもそういった形で・・・。

〔参加者〕

やったださっているという話も聞くんですが、他の地区からお手伝いに来る方も、ここは狭いね、よく文句いわんねとか（笑い）。お願いもしているみたいだけどねなんて言うんですけど、目立つところだけではなくて、細かいところも是非よろしくお願いいたします。

〔山梨市農林課長〕

そちらの地区も22年度から事業を展開するという予定で今事業を進めていますけども・・・。

〔参加者〕

そうですか。中村地区なんです、見ていただければ分かると思うんですけど・・・。

〔果樹食品流通課長〕

中村も対象地区になっていますので。

〔参加者〕

そうですか。じゃあ近い将来は（笑い）。私がまだ運転できる頃に・・・。

〔果樹食品流通課長〕

皆さん方でよく相談をして、その地域の人たちからご要望をいただくような形ができれば、実施地区の範疇になっていますので対応はできると思います。

〔参加者〕

ちょっと先ほどのトイレのことなんですけれど、うちでは軽トラにレンタルのトイレを乗せて縛ってそれで移動するようにしています（笑い）。

〔参加者〕

ありがとうございます。

〔参加者〕

うちは専業農家で、1町5反ばかりを夫と二人で無核の、種なしの巨峰とピオーネをハウスから露地を専用にやっています。

〔知事〕

ハウスをやっておられるんですか。

〔参加者〕

ハウスと、あと露地をやってはいますが、今一番感じていることは、後継者不足ということと、そして高齢化になってきまして荒れ地がすごく多くなってきていることです。自分の子どもにも自信を持って農業を勧めることはできない状態です。

それはどうしてか考えてみると、30年前と単価が全然変わっていないということ。かえって安くなっているということですね。その反面色々な資材費とか経費とか燃料費とか人件費は本当にびっくりするぐらい高くなってます。あと温暖化のために病気がすごく発生してきているんですね。今までとは違った病気が。それに掛かる農薬代もたくさんになってきていますし、それと病害虫ですね、虫がすごく多くなってきて、木1本、1年で食べられてしまうことが多くなってきています。

やっても本当に苦勞が報われなくて、明るい希望が見えてなくて、色とすれば灰色っぽい（笑い）、そして1年終わってみんなで話をしてみると、やっぱり経費ばかり掛かって、これじゃ本当に赤字で、何のために働いているのかねという声が多く聞かれます。

そういう悲しい気持ちでやっているんです。加工品なんかをやってみたらと言われるんですけど、忙しい時は一日18時間から20時間労働するんですね。6月から9月とか、まあ休憩する月はありますけれども。そうするとやっぱり忙しすぎてこういうものに目が

いかない、分かっているんだけどもできない状況です。

だからもっと明るい、楽しい農業ができるにはどうしたらいいかなということがいつも頭の中から離れません。

〔知事〕

観光農業みたいな、観光農園みたいなことはおやりになっているんですか。

〔参加者〕

やっていないです。

〔知事〕

そうするとハウスまでお作りになって、それでどうやって・・・やっぱり系統で出荷しているんですか。

〔参加者〕

そうです。JAさんに行ったりとか、自分たちで考えたり・・・。

〔知事〕

そうですか、JAさんにね。まあJAさんに頼るのも大事なことなんですが。ご自分たちでいいものを作っているんですから、直接出してもいるんですね。

〔参加者〕

自信を持って出しています。

〔知事〕

それも余り上がらないですか、値段が。

〔参加者〕

ええ、やっぱりこういう不景気ですから4キロが2キロになったりとか、段々需要も少なくなってくると・・・。

〔知事〕

運送費も自分で払わなきゃいかんから、やっぱりなかなか余り高いことも言えなくなっちゃうんですね。

〔参加者〕

そうなんです。いいもの、美味しいものを作るのが私たちの義務で、それをやっぱり高く評価してもらって買ってもらえること、買うということができれば活性化にもなって、そうすれば子どもたちにも自信を持って魅力的なことを伝えられるけど、今のままだと本当に楽しい、いいことなんだけど、自分から勧めることができない状態です。

[知事]

それは本当に切実な悩みですね。

そのところは、法人としてはどうやっているんですか。(笑い)

[参加者]

うちは一応自分で営業したりして・・・。

[知事]

例えば今のような方のお話と同じような悩みを抱えていたと思いますが、どうされたんですか。

[参加者]

ええ、今もずっと抱えています(笑い)。やはり今の農業というのは確かに作ることも大事だけれども、ある人が言ったんですが、やっぱり企画とプロデュースですよ。いかにその物を売るかということだから、バラバラの葡萄でもそれも高く売れるし、いい物も違う所に行けば売れるし、それを欲している所に自分たちがどういうふうに出すかということだから、やはり農協さんにお任せしての系統出荷だけでは(笑い)、スーパーに行くような果物を山梨県では作ってはないんだから、やはり努力してもうちょっと。

[知事]

おっしゃるとおりです。

[参加者]

皆さん努力して本当に・・・、いやもう私もちょっと色々統計を見てみると本当に山梨県の人と言うのは我慢強くて、作ることにすごい熱心なんだなというのを・・・。

[知事]

いや、高い技術を持っていますよね。

[参加者]

そして葡萄と桃というのは一番時間が掛かっているんですよ、果物の中で。考えようによれば、全国で一番苦勞して作っている県民じゃないかなと私はすごく感じていて、だからそれをもっと企画とプロデュースで、やはり大勢の力でやっていく工夫をしていかないと・・・。うちは自分で従業員を抱えているから必死で色々全国を歩いたり、加工をしたりとか、いろんな情報を得ながらやらなきゃと思って、本当にちょぼちょぼですけどもやっています。やはりそういうことをしていかないと地域が本当につぶれちゃうという、ちょっと語弊があるかも分からないけれども、もう大体70代80代の方がほとんどですから、畑はもう猪と鹿で上のほうはほとんど荒れているというような状態の所なので、やはりそこもつぶさないで何かしていかなければと。

まあ突飛な考え方かも分からないですけど、お年寄りの方で野菜を作りたい人や、都会

の人にでも、うちの山のほうでも野菜を作ろうと思えば畑があるから、そういう所でも流動化して貸してあげれば、果物ではないけれどもやっぱり農地としては残りますよね。

だから消費者と言うんですか、土地を欲している人たちがどういうものを望んでいるか、そういうことをよく聞きながら・・・まあ果樹もそうですけれども、やっぱり土地が荒れていれば観光に来た人も、耕作されていないなと思うとがっかりしますよね。やはり土地を有効に利用するような手立てというか、策というのをしてもらいたいと思いますけどね。

[知事]

おっしゃる通りでね・・・。

[参加者]

私は県外から嫁いで来まして、農家というのは本当に初めてで、山梨に来ましてもう27年、農業を始めて20年ぐらいになるんですけど、私は主人の言いなりに動いているというだけで、本当に山梨の農家の方というのはよく働くなと、今本当に思いました。

私も後継者の問題で、家には男の子が二人いますけど、やっぱり跡を継げとははっきり言えないんですよ。まあ農家はこうだよと、楽しいこともあるしと色々言うんですけど、やっぱり継いでくれとはこの状態では言えないですよ。

でも、もう27年になりますけど、すごい住みやすくっていい所です。(笑い)

[知事]

それで高く売ればね。(笑い)

[参加者]

それが実家の姪夫婦が何を考えたのか、山梨に来て葡萄とか桃を作りたいなんて言っているんですよ。

[知事]

そういう若い人たちが来てくれて意欲的にやってくれるといいですね。

[参加者]

そうですね。そういうことが出てくれれば。

[知事]

そうですね。がんばって下さい(笑い)。

[参加者]

私が思うのに、県内の旅館とか飲食店でもデザートに余り桃、葡萄を使ってもらっていない。なので皆さんの意識を高めてもらって、せっかくこんなにおいしい桃、葡萄があるんですから、桃、葡萄のデザートしか出さないぐらいの勢いでやってもらって、そして夏には当然おいしい生の桃も出してもらって、時期を過ぎた時には桃の瓶詰を使ってもら

ようにして。でも桃の瓶詰も農家の方たちが作るとなると、忙しい中作りますので本数も作れませんし、本数が作れませんから当然コストも掛かります。だから企業と連携して大きな瓶に、私が簡単に思うには、小さい瓶だから八つに割ったり、九つに割ったりしなければならないけど、大きな瓶だったらただ半分に割って種を取るだけで詰めることもできる。そうしたらコストも安くなるからホテルやそういう所だって使いやすくなるんじゃないかと思うんですよね。

葡萄のアイスクリームはあるんですけど、桃のアイスクリームって、ネットで見たら岡山にはあるらしいんですけど、こちらでは食べたことはないんですよね。まあ桃は扱いつらいのかもしれませんが、そういうものも、企業の方とかプロの方がいらっしゃるんで、そういう方のお知恵も借りて開発していってもらって、そして峡東地域では桃も葡萄もデザートも、ソフトクリームも、常にどこの店にもあるよというふうになったらすごく素敵ですよ。

そうすれば地産地消で、私たちが大事に一生懸命作った桃が、穴に埋められることはなくなる（笑い）。泣けるんですよね。一生懸命愛情かけて作った物が穴に埋められちゃう。お友達なんか来ると、なんでこの桃捨てちゃうのと言って、ほんとに良く食べてくれるんですよ。

〔知事〕

そうですね。特に完熟の桃なんかうまいですもんね。もったいないですよ。

〔参加者〕

うまいですよ。ただ傷があったり、ちょっと柔らかいだけで、缶詰にも、ジュースの原料にもなることができずに埋められちゃう。そういう物を利用したり、手を掛けたら売れるようなものを、上品に手立てをしてもらって、桃というのは色が地味だから、もしかしてジェラートなんかも扱いつらいのかもしれないけれど、その地味な物を上品に生かすような工夫ってきっとあると思うんですよね。そういうことをしてくれたらすごい素敵だなと・・・。

〔知事〕

そういう企業が出てくればいいんですけどね。全くそのとおりですよ。

農家でやったって大変なんです。一番忙しい盛りですしね。桃というのは観光も大変ですよ。観光客に来てもらっても困るでしょう、忙しいのにね（笑い）。だから難しいんです。

〔参加者〕

補助金もあったり、加工所を造りなさいという指導も色々あります。ただ、それをしなさいと言われてもできません、実際。無理ですよ。

〔知事〕

企業というのはいませんか。

〔果樹食品流通課長〕

中小の食品加工業者みたいなどころと連携しながら、そういう新食材を開発するような補助事業みたいなものもあることはあるんですけども、それがどういう形でマッチングできるかというところはやっぱり難しいところだと思います。それぞれ地域の皆さん方の考え方がまとまれば、またご相談いただければというふうに思うんですけど、今言われたように実際に自分たちが、作っている人たちがやろうとするとやっぱり忙しくてそこまで手が回らないというところがあると思うんですね。

〔参加者〕

そうなんです。自分たちの生活は自分たちで守る、当たり前なこと、分かっているんですけど動けないんです。だったら忙しい人たちばかりじゃなくて、ちょっと手が余っている人たちを利用しながら・・・私たちにやれと言われてもどんなふう動いていいのか分からないし、顔も広くありません。そういう広い方たちが中心になってくれたなら、おんぶに抱っこじゃないかと言われるかもしれないけれど、私たちもついていきたいと思っています、自分たちの生活のことですから。

〔知事〕

（机の上の加工品を指して）なんかみんなこういうふうにしていていけばね、いろんな意味の使い道があるんですよね。

〔参加者〕

でもこれだとやっぱり観光客用ですよ。企業にはやっぱりこれだったら使えないですよ。高いものですから。私たちもそんな高いデザートを食べに行きませんし。だからコストを安くできて、何かうまい工夫はないんでしょうかねと、いつも思うんですよ。

〔知事〕

まあそういう企業が出てきてくれるといいんだけど、なかなかやっぱり中小の食品加工業さんというのも余りそういうことまで・・・。

〔果樹食品流通課長〕

そうですね。やっぱり食品業者とすれば加工していることについて儲けはするんですけど、じゃあ原料供給する皆さん方のところにそれがちゃんとバックできるかというところやっぱり・・・。

〔参加者〕

それは例えば軌道にのるまでちょっと公費をつぎ込んであげるとか、何かできないんでしょうかね。

〔果樹食品流通課長〕

やはりきちっと企業さんと提携してやっていかないと、自分も主体として入っていかな

いと、原料供給だけだと所得には余り結びついてこないというところは出てくるんですね。

〔知事〕

補助制度はあるんですよ。あるんですが、なかなか出てこないんですよ。俺がやってみようという、そういう食品加工会社があればそれに対するいろんな支援措置というのはあるんですよ。けどなかなかそこまで足を踏み切れないというところがあるんでしょうね。

〔参加者〕

何でもそうなんですよ。もちろん私たちがしなければいけないんですけど、誰かがって言っちゃいけないとは思いますが、何かできないでしょうかねっていつも思うんですけどね。

〔知事〕

全くそのとおりですね。まあこれも考えてみましょう。大事なことですよね。

〔参加者〕

今主人と一緒に農業をやっています。

うちの回りなんかも荒れ地がいっぱい出てきまして、電気の柵を使って猪が来ないようにしたりしています。

農閑期に皆さんの果物を加工にするなんていうことも考えたりすることがあるんですけども、段々年齢が高くなると足や腰も痛くなったり（笑い）。うちなんか子どもが女の子ばかりですので後継者ということも考えづらかったり、婿取りというのもまた難しい面もあったりするので、色々考えると結構暗いんですけども（笑い）。

たまたま娘が中国に行っていて、知事さんも桃のことで行かれたということなので、その話を聞かせていただければと思います。

〔知事〕

今年香港で桃をはじめとする山梨のフェアをやろうかと思っているんですよ。中国本土、中華人民共和国はやっぱりまだ桃は禁輸なんですよ。だからこれを何とか解禁してくれと。リンゴとか梨はもう出せるんですね。例えば、コシヒカリなんかもうんと高く売れるわけですね。けど桃はまだモモシンクイガというようなものがあったりするものだから・・・。まあしかし次はみかん、桃、葡萄、こんな順番で輸出が可能になってくるんじゃないですかね。

台湾はすでにやっていて、日本から出ている桃の輸出というのは台湾が一番多いんですけども、輸出はできるんですが検疫が厳しくて大変なんですよ。だからコンフェューザーを使ったりしながらシンクイガが出ないようにして出そうとか、今そんなことを一生懸命やっているんですけどもね。

香港は、これ何の規制もないものですから、あるいはロシアですね、ここは規制がなくて、モスクワに桃を持って行ったら、これは素晴らしいもんだと、是非一つ入れたいとい

う人が多いようです。ただやっぱりそこに出すについては、やっぱり輸入業者、あとはお金をちゃんと取らないといけませんからね、その手続きがなかなか難しかったりというようなことがあるんですがね。そういうことを一生懸命工夫をしている人が今おりますね。

輸出を何とかして広げていきたいというふうな感じがしますね。需要は何しろ無限ぐらにあるわけですからね、向こうのほうには。中国なんていうのも桃をずいぶん作っていますけど、いい物は作っていませんからね。だから本当にお金持ち向きの山梨の桃というのは持っていけば売れると思うんですよね。まあそういうことも一生懸命やろうとしているんですけどね。

〔司会〕

大体予定の時間になりました。皆さんからお話しがなければ知事さんからまとめをお願いしたいと思います。

〔知事〕

まとめもちょっとできにくいぐらい（笑い）。

本当に私どもが日頃考え、悩み、心配していることを皆さんがそのまま心配をしておられるなどと思って、本当に困ったなという感じは非常に強くしているんです。しかし何とか皆さんがおっしゃったようないろんな問題をクリアーして、この山梨の素晴らしい果樹地帯が、将来、休耕田や遊休農地だらけになることのないように、そして儲かる農業が進められて、少しでもやっぱり、若い人も段々農業というものに対する関心が強まってきますからね、若い人がやっぱり跡を継いでこられるように、そういう農業を展開するようにはやっていかなきゃいかんと思いますね。

そのためには、やっぱり今までと同じやり方をしていてこれはどうしてもだめなんです。皆さんにじゃあ変わったことをやれと言ってもなかなか簡単にはいかんですよ。そのところを行政がいろんなてこ入れをしたりしながら、いい方向に持っていきたいなと思いますね。

今日は本当に貴重なお話を、いいお話を聞かせていただきまして本当にありがとうございました。皆様方のご期待にどのぐらい応えられるか分かりませんが、何とかしなきゃいかんという気持ちだけは、私を始めここにいる農政部の職員も本当に持っておりますので、是非これからも色々と機会をみて教えていただきたいし、また何かご意見があれば是非お出しをいただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

〔皆で〕

ありがとうございました。

〔司会〕

皆さんどうもありがとうございました。またいろんなご意見があると思いますので、農政部、それから私ども広聴広報課にご意見、それから質問等がありましたらお寄せ下さい。今日はどうもありがとうございました。